

# 第 章

教育課程、教育研究の  
内容・方法と条件整備

## 第 章 教育課程、教育研究の内容・方法と条件整備

### 1. 短期大学部専攻科におけるカリキュラム及び教育方法（体制）

#### 1-1. 教育目標・目的のカリキュラムや教育方法等への反映

##### [現状の説明]

短大専攻科は実技の研鑽・追求に重点を置き、建学の精神をふまえてカリキュラムを組んでいる。学生達が自分の専門に打ち込めるよう週1回の専門レッスンと、更にもう1回専門に関するレッスンを受講できる。また、選択科目も専門に関する科目、専門以外の科目も設置されており、学生が自分自身で考えて目的に合わせた時間割編成が出来る。2003年度におけるカリキュラム及び専任教員の配置状況を図表2に示す。

図表2 短期大学部専攻科の2003年度カリキュラム表

##### 共通科目

授業科目名	授業形態				単 位			教員配置	
	講義	演習	実技	実習	必修	選択必修	選択	専任	非常勤
修了研究					4				
コンサート・プロデュース					1				
ポピュラー音楽概論							2		
鍵盤楽器特修							2		
音楽史特論							4		
音楽史特論							4		
コンピューター音楽演習 -									
- (初級)							2		
- (中級)							2		
吹奏楽指導法							2		
AV機器概論							2		
音楽社会活動実習							2		
児童教育心理学特論							2		
音楽療法(応用)							2		
音楽療法(実践)							1		
外国語S (英会話)							2		
外国語S	英語						2		
	イタリア語						2		
	ドイツ語						2		
	フランス語						2		

(修了要件単位数：必修科目 5 単位、選択科目から 7 単位以上修得)

##### 作曲専攻 専門科目

授業科目名	授業形態				単 位			教員配置	
	講義	演習	実技	実習	必修	選択必修	選択	専任	非常勤
作曲					6				
作曲理論S							4		
作品分析							2		
対位法作品研究							2		
デスクトップ・ミュージック編曲法							2		

(修了要件単位数：必修科目 6 単位、選択必修科目 8 単位以上修得)

## 声楽専攻 専門科目

授業科目名	授業形態				単 位			教員配置	
	講義	演習	実技	実習	必修	選択必修	選択	専任	非常勤
<声楽>									
声楽A(歌唱)					6				
声楽B(発声)						4			
ドイツリート演習						2			
日本歌曲演習						2			
声楽資料研究						2			
舞台制作実習						2			
<ミュージカル>									
声楽A(ボーカル)					6				
声楽B(アクティング)						4			
演出演習						2			
ダンス演習						2			
舞台制作実習						2			
<ポピュラー・ボーカル>									
声楽A(ボーカル)					6				
声楽B(アクティング)						4			
ポピュラー音楽研究S						2			
ダンス演習						2			
舞台制作実習						2			

< >: コース名を示す。教員配置に印がない箇所は、履修生不在を示す。

(修了要件単位数：各コースにおいて必修科目 6 単位、選択必修科目 8 単位以上修得)

## 器楽専攻 専門科目

授業科目名	授業形態				単 位			教員配置	
	講義	演習	実技	実習	必修	選択必修	選択	専任	非常勤
<ピアノ・クラシック>									
器楽A					6				
ピアノアンサンブル -									
- A(連弾)						4			
- B(二台)						4			
ピアノ初歩教材研究						2			
ピアノ作品構造研究						2			
<ピアノ・ポピュラー>									
器楽A					6				
器楽B						4			
器楽アンサンブル						2			
ポピュラー音楽研究S						2			
ポピュラー音楽概論						2			
<電子オルガン>									
器楽A					6				
器楽アンサンブルS						2			
ポピュラー音楽研究S						2			
器楽編曲法S						2			
器楽指導実習						2			
<管楽器・打楽器>									
器楽A(応用)					6				
器楽B(基礎)					6				
吹奏楽SA						2			
吹奏楽SB						2			
合奏(A)S						2			
オーケストラ						2			
管打楽器リペア実習						2			
<弦楽器>									
器楽A(応用)					6				
器楽B(基礎)					4				
オーケストラ						2			
室内楽研究						2			
弦楽作品構造研究						2			
<ジャズ>									
器楽A(応用)					6				
器楽B(基礎)					4				
ポピュラー音楽概論						2			
管打楽器リペア実習						2			
ジャズアンサンブル						2			
<箏>									
器楽A(箏)					6				
器楽B(三絃)					4				
箏 歌						2			
箏合奏						2			

< > : コース名を示す。教員配置に印がない箇所は、履修生不在を示す。

(修了要件単位数：各コースにおいて必修科目 6 単位、選択必修科目 8 単位以上修得)

必修・選択必修・選択科目合せて 73 コマ(2003 年度)あるが、箏コースを除き、必修実技科目では専任及び非常勤教員が配置されている(作曲においては専任教員のみ)。必修選択科目においても、その殆どを専任教員が担当しており、73 コマの担当教員の比率は専任：非常勤 = 58 : 29 のバランスになっている(合計して 73 にならないのは専任と非常勤の両方を担当している科目があるためである)。

### [自己点検・評価及び長所と問題点]

短大専攻科の主目的たる実技の研鑽・追求の為、それぞれの専門に即した科目を多くし、目的達成のために考えられたカリキュラム編成だと思われる。色々な楽器が一同に集まる機会があるので室内楽、他楽器とのアンサンブル、伴奏法の授業の充実が望まれる。

図表2で分かるように必修科目、選択必修科目は特に短大専攻科の骨格となる科目であるため専任教員を多く配置している。また、専任以外の教員しか出来ない科目では、各分野に秀でた非常勤教員が担当している。

### [将来の改善・改革に向けた方策]

様々な音楽分野・専門以外の分野を体験できる場を、今後より多く与える事が、音楽創造には重要だと考えられる。また現在のカリキュラムで、すでに選択科目の増加等を示し、分野を越えた履修が可能となっているので、今後可能であれば伴奏法についても履修できるようにしたい。現時点においても、特にアンサンブル(含伴奏)は在学中、他の専攻との連携が取り易い体制となっているため、この長所を生かしてより充実するように改善・改革を行う予定である。

## 1-2. 教養教育への取り組み

### [現状の説明]

2000年度より短大専攻科は専攻実技を研鑽・追求する体制に改革された。以来教育体制もそれに沿った教育内容に改められてカリキュラムが作られている。

2001年度より短大専攻科の求める語学体制が確立し、2001～2004年度は本教育課程における一般教育科目の占める割合が20.0～26.1%の間に維持されている。短大専攻科の魅力の一つである学位「芸術学学士」の取得の為には、短期大学と短期大学専攻科において修得した専門関連科目(所属専攻に関わる単位)の単位数と、それ以外の一般教育、外国語、保健体育科目の単位を合わせて所定の単位以上になるように一般教育科目から取得する。この中には外国語科目の単位も含まれる。図表3に声楽専攻・声楽を例にして、各年度のカリキュラム上における一般教育科目の占める割合を示す(他の専攻においてもほぼ同じ状況を示す)。

図表3 年度別における一般教育科目の比率(声楽専攻・声楽)

年度	一般教育科目(単位:科目数)				総数
	教育科目	外国語科目	小計	比率(%)	
2001年度	2	2	4	20.0	20
2002年度	4	2	6	26.1	23
2003年度	4	2	6	26.1	23
2004年度	4	2	6	26.1	23

### [自己点検・評価及び長所と問題点]

実技を主とする短大専攻科においては、それぞれの専攻実技に充分時間をかけさせたいという配慮があるので、特に教養教育が少なすぎる、不足だとは思われない。また、学位「芸術学学士」取得の為には、短期大学において取得した専門以外の科目と合わせて、それらの単位を含む科目を取得する必要がある。その為、2002年度から音楽療法応用、実践が増えて教養科目（学位取得のための必要単位には含まれない）の割合が多くなった事は、学生にとってより柔軟な履修が可能になったといえる。学生の能力にも幅はあるが、音楽教養として今後ソルフェージュの必要性も考えなければならない。

### [将来の改善・改革に向けた方策]

短大専攻科は主に実技を研鑽・追求する課程である。また、それを目的として選抜試験に合格した学生達であるので、特に教養教育への取り組みはあまり考慮されていない。しかし時代に対応した教育は考えなければならないし、ある程度の幅のある教養も必要であるとの判断から、2002年度から外国語(独・伊・英)、音楽療法(応用・実践)を選択できるようになった。2003年度からは外国語SIとして英会話を選択できるようになり、Sとして英・伊・仏・独の4科目種から1科目選択できる。今後は、音楽教養として、ソルフェージュも履修可能としていきたい。

## 1-3. 専門教育への取り組み

### [現状の説明]

2000年度より短大専攻科は専攻実技を研鑽・追求する体制に改革された。以来教育体制もそれに沿った教育内容に改められてカリキュラムが作られている。

実技を主とする専攻科においては、当然ながら専門に関する科目が主となる。専門科目の占める割合を表にしてみるとその割合は歴然としている。これは短大専攻科の教育目標を達成するために当然の結果であるといえる。図表4に2001年度以降、各年度のカリキュラム上における専門科目の占める割合を示す。

図表4 年度別における音楽系科目の比率（声楽専攻・声楽）

年度	音楽系科目(単位:科目数)				総数
	専門科目	共通専門科目	小計	比率(%)	
2001年度	9	7	16	80.0	20
2002年度	9	8	17	73.9	23
2003年度	9	8	17	73.9	23
2004年度	9	8	17	73.9	23

図表4でわかるように短大専攻科においては圧倒的に専門科目が多い。2001年度の80%（2000年度も同値）、2002年度以降においても73.9%を維持している。

**[自己点検・評価及び長所と問題点]**

短大専攻科では、圧倒的に専門教育を重視した内容を持った教育体制である。前述のように、現時点においてはまずソルフェージュの履修を可能となるようにしたい。学生に対するアンケート調査等からの要望にも配慮し、必要な科目を厳選していく必要があるが、前項の教養教育でもふれたように、専攻科は1年である為、その学年の学生の希望がその年度に実現できないのが残念である。

**[将来の改善・改革に向けた方策]**

アンケート調査などで学生が希望するような一般教育科目・ソルフェージュ関係の科目、伴奏法などが加えられると更に充実度が高くなると思われる。教育目標達成の為に、カリキュラム上における専門科目の占める割合を70%以上に常に保つ必要がある。その為には、授業の厳選と学生の要求する教養科目、ソルフェージュ関係の科目、他楽器とのアンサンブル(含伴奏)の授業が加わる事により充実した内容になると思われる。

**1-4. カリキュラムの体系性とバランス****[現状の説明]****a. 卒業に必要な単位数**

短大専攻科に1年以上在学し、必修科目である修了研究、及びコンサート・プロデュース、専攻別必修科目として「作曲」(作曲専攻)、「声楽A」(声楽専攻)、「器楽A」(器楽専攻)からなる3科目の11単位と、選択必修科目(6~9科目)から8単位、選択科目(12~15科目)から7単位の合計26単位以上が修了要件単位である。選択必修科目から8単位以上取得した場合は、選択科目の修了要件単位に含められる。

これらは学生便覧に各専攻毎に明確に記されている。必修・選択必修・選択科目が明記され、その中で最低修得単位数が示されているので学生達はそこから自分に必要な単位を持った科目を選ぶことができる。実技の勉強に集中したい者は履修科目数を最小限にして必修単位分だけに、幅広く他の分野まで勉強したいものは選択科目から可能な限り選べる。

**b. 単位の認定**

専攻科の単位算定基準は学則第31条により定められており、1年以上在学した者の所定の単位認定は教授会の議を経て学長が行なう。

**c. 単位の授与**

単位が認定され、修了を認められたものには修了書を授与する。

#### [自己点検・評価及び長所と問題点]

短大専攻科の教育理念に沿った要件単位設定である。実技系の単位を多く設定しているのは実技の研鑽・追求であることが学生に良く理解できる。

#### [将来の改善・改革に向けた方策]

必修科目を減らし、学生の科目選択肢が増え専門外の科目も選択可能となっている。実技の研鑽・追求の為には満足できる1年であると言える。現時点において、卒業に必要な単位数として適当である。

### 2. 本学の授与する資格・称号と卒業生の進路

#### [現状の説明]

短大専攻科で取得できる資格に学位「芸術学学士」がある。学位の取得を考えている者は学位授与に必要な62単位以上の内、短大専攻科で28～36単位まで取得できるのでそれに合わせた科目と単位を取ればよい。これは短大専攻科の大きな魅力のひとつである。他に取得できる資格としては、エクステンション・センターによる準備講座を受ける事により、音楽教室等への資格が取れる。

#### [自己点検・評価及び長所と問題点]

短大専攻科は実技主体の教育課程ではあるが、これからの社会状況に合わせて、さらに幅広い資格の取得ができる体制を整える必要もあるように思われる。

#### [将来の改善・改革に向けた方策]

エクステンション・センターによる資格取得の為の準備講座も開催しているが、今後、幼稚園・小学校の教員免許取得の為の方策を検討する必要があるのではと思われる。

### 3. 授業内容・教育方法概要

短大専攻科は作曲専攻・声楽専攻・器楽専攻から構成され、2001年度以降におけるカリキュラム上全ての授業科目における授業形態の割合を、各専攻別に図表5に示した。また、図表6にはそれらについての必修・選択必修・選択科目数の割合を示した。また、授業内容と教育方法については各専攻ごとにまとめた。



図表 5 各専攻における年度別の授業形態

専攻	年度	授業形態				総科目数
		講義科目	演習科目	実技科目	実習科目	
作曲専攻	2001 <sup>*3</sup>	5 (29.4%)	7 (41.2%)	4 (23.5%)	1 (5.9%)	17 (100%)
	2002～2004	6 (30.0%)	9 (45.0%)	4 (20.0%)	1 (5.0%)	20 (100%)
声楽専攻 <sup>*1</sup>	2001 <sup>*3</sup>	5 (25.0%)	9 (45.0%)	4 (20.0%)	2 (10.0%)	20 (100%)
	2002～2004	6 (26.1%)	11 (47.8%)	4 (17.4%)	2 (8.7%)	23 (100%)
器楽専攻 <sup>*2</sup>	2001 <sup>*3</sup>	5 (31.3%)	8 (50.0%)	2 (12.5%)	1 (6.3%)	16 (100%)
	2002～2004	7 (36.8%)	9 (47.4%)	2 (10.5%)	1 (5.3%)	19 (100%)

<sup>\*1</sup>：声楽コースで代表した。その他のコースもほぼ同じ値を示す。

<sup>\*2</sup>：ピアノ・クラシックコースで代表した。その他のコースもほぼ同じ値を示す。

<sup>\*3</sup>：2000年度も同じ値を示す。

図表 6 各専攻における年度別にみる履修形態

専攻	年度	履修形態			総科目数
		必修科目	選択必修科目	選択科目	
作曲専攻	2001	2 (11.8%)	5 (29.4%)	10 (58.8%)	17 (100%)
	2002	3 (15.0%)	5 (25.0%)	12 (60.0%)	20 (100%)
	2003	3 (15.0%)	5 (25.0%)	12 (60.0%)	20 (100%)
	2004	3 (15.0%)	5 (25.0%)	12 (60.0%)	20 (100%)
声楽専攻 <sup>*1</sup>	2001	2 (10.0%)	5 (25.0%)	13 (65.0%)	20 (100%)
	2002	3 (13.0%)	5 (21.7%)	15 (65.2%)	23 (100%)
	2003	3 (13.0%)	5 (21.7%)	15 (65.2%)	23 (100%)
	2004	3 (13.0%)	5 (21.7%)	15 (65.2%)	23 (100%)
器楽専攻 <sup>*2</sup>	2001	2 (12.5%)	4 (25.0%)	10 (62.5%)	16 (100%)
	2002	3 (15.7%)	4 (21.0%)	12 (63.1%)	19 (100%)
	2003	3 (15.7%)	4 (21.0%)	12 (63.1%)	19 (100%)
	2004	3 (15.7%)	4 (21.0%)	12 (63.1%)	19 (100%)

<sup>\*1</sup>：声楽コースで代表した。その他のコースもほぼ同じ値を示す。

<sup>\*2</sup>：ピアノ・クラシックコースで代表した。その他のコースもほぼ同じ値を示す。

短大専攻科では実技の研鑽・追求に重点を置き、専門分野の学修をより深く押し進めるため、必修とは別に選択実技レッスンも履修可能である。必修科目を減らし、選択必修科目や選択科目を増やすことで、学生自身の学習計画で自由に多様な科目が履修できるようになっている。

基礎学力不足のための補助授業などは設定されていない。入学試験により選抜された学生が集まっているため、現時点において必要性がなく、今後設定される予定も今のところない。しかしながら、本項の特記事項に示す方策により、基礎学力不足を防ぎ、また実技試験では再試験を課すことによってそのレベル維持に努めている。

## 4. シラバス

### [現状の説明]

前述したように、短大専攻科では学生が自分自身で考えて、目的に合わせた時間割編成が出来る様にカリキュラムが編成されている。その為、選択科目の占める割合が多く、学生にとって、ほぼ全ての授業が履修対象となる。そこで、短大専攻科におけるシラバスについてまとめて報告する。

2000 年度よりシラバスも一新された。入学試験合格後まもなく行なわれる合格者ガイダンスにおいて、時間毎の授業内容、成績評価方法を示すシラバスを掲載した講義概要が学生達に配布され、学生達は自分の選択したい科目を選ぶのに役立てている。また、教材についての指示が書かれている科目もあり、準備の面でも役立つように工夫されている。講義のねらいは1年間もしくは半年間の目標が記載されている。

教員は、希望によりいつでも講義概要を受け取れるようになっている。その為、マイナーチェンジを含め最も新しい講義概要が配布されている。教員においては自分の指導計画を示す場である。また、シラバスに沿って授業が進んでいるかの確認にも役立てている。

### [自己点検・評価及び長所と問題点]

実技に関する授業内容についても、講義概要に細かく記載されており、授業の狙いを知るとともに、学生には履修の際に役立っている。各回ごとの授業の概要・参考書の項目に関しては、記載されていない科目もあるので可能な限り記載される方が学生には参考になる。ある科目ではテキストに要する費用まで記載してほしいと求められたこともある。

### [将来の改善・改革に向けた方策]

担当教員に各回の授業の概要・使用教材・テキストを可能な限り記載するように求め、記載されない場合にはその理由を記載するように求めていく必要がある。

## 5. 各専攻における授業内容・教育方法

### 5-1. 作曲専攻

#### 5-1-1. クラス規模

### [現状の説明]

作曲専攻の入学生は2001～2004年度において0～3名である。個人レッスンのような形態になるが授業の中には他の専攻と合同で開講している科目もある。少人数ということもあって学生は積極的に学んでいる。各授業の出席率が高い(出席を取った科目として、2003年度コンピューター音楽演習 初・中級、音楽史特論1・2(各専攻合同授業)において平均 83.3～93.0%の出席率)ということも学生の積極性を示しているといえる。

**[自己点検・評価及び長所と問題点]**

作曲専攻は学部、短期大学と同様に少人数であるので教育目標・目的が徹底できる長所がある。また、専攻科独自に開講されている科目に魅力を感じて専攻科を目指す学生もいる。

**[将来の改善・改革に向けた方策]**

今後も継続して、能力ある学生、学修意欲の強い学生の確保のために専攻科の魅力をよりアピールしていかなければならない。

**5 - 1 - 2 . 達成目標****[現状の説明]**

合格者ガイダンスの際に配布される学生便覧中の履修方法案内を見ると、履修の仕方、単位計算、必修科目、選択科目とその内容がよく理解できる。また、講義概要には授業のねらい、成績評価の方法が書かれている。

**[自己点検・評価及び長所と問題点]**

作曲実技の達成目標は修了研究において発表される。その研究発表を聞くことによってその学生の成果を判断できる。それ以外の授業の達成目標はレポート、試験によってその判断がなされる。

**[将来の改善・改革に向けた方策]**

特に将来に向けた改革・改善は必要ないと思われる。

**5 - 2 . 声楽専攻****5 - 2 - 1 . クラス規模****[現状の説明]**

2001～2004年度の各コース別の入学者数を図表7に示す。

図表7 各コース別の入学者数

コース名	2001年度	2002年度	2003年度	2004年度
声楽	9	8	10	3
ミュージカル	0	0	0	0
ポピュラー・ボーカル	2	0	0	2

年度によって学生数が変動するので、少ない年度は少人数の良さを、多いときはアンサンブルなどにその利点を生かしている。各授業の出席率（平均 83.3～93.0%）でその意欲を判断できる。

**[自己点検・評価及び長所と問題点]**

声楽専攻のうち声楽は毎年学生を確保しており、教育日程に沿った徹底した教育を行っている。また、学生同士も人数の少なさから連携が良いといえる。しかし、募集定員より学生数が少なくなるとアンサンブルの授業に影響が出てくると考えられる為、この人数の確保を目標にしていきたい。年度によっては募集定員(5人)を大きく上まわっているが今のところ特に問題は起きていない。もっと大きく上まわっても授業の仕方を工夫すれば十分対応可能である。

**[将来の改善・改革に向けた方策]**

2001～2003年度は問題なかったが2004年度は3人という人数であった。特に声楽は人数を必要とする専攻なので、今後、募集定員を確保するための方策を検討する必要があるように思われる。

**5 - 2 - 2 . 達成目標**

**[現状の説明]**

声楽専攻の達成目標は修了研究の場においてその成果が伺える。1年間の成果をオペラハウスという大舞台で発表することによって示せるのである。卒業要件としては実技優先の専攻科としては適切である。講義概要にその目標が明記されている。

**[自己点検・評価及び長所と問題点]**

実技主体の専攻科においてその要件は適切である。達成目標は講義概要に明確に示されており理解し易い。

**[将来の改善・改革に向けた方策]**

特に今の体制で問題はない。

**5 - 3 . 器楽専攻**

**5 - 3 - 1 . クラス規模**

**[現状の説明]**

2001～2004年度の各コース別の入学者数を図表8に示す。

図表 8 各コース別の入学者数

コース名	2001年度	2002年度	2003年度	2004年度
ピアノ・クラシック	13	16	9	5
ピアノ・ポピュラー	0	1	1	0
電子オルガン	0	0	2	3
管・弦・打楽器	2	2	4	14
ジャズ	1	1	2	1
箏	0	0	0	0

年度によって学生数に大きなばらつきがあるので、授業によっては開講できないものもある。可能な限り毎年募集定員の学生数は確保できることを望みたい。しかし全体の人数が少ないので学生間のつながりも密接になっているようで学習意欲も感じられる。

#### [自己点検・評価及び長所と問題点]

上記に述べたように人数が少ないことによる学生間の親密度が増し、一体感が感じられる。しかし少ないことによる弊害もある。授業においてはアンサンブル(同楽器)ができない、実技においては競争意識が芽生えにくいなどが感じられる。

#### [将来の改善・改革に向けた方策]

声楽専攻の項でも述べたように学生数の募集定員の維持を何よりの課題としたい。これからの少子化の影響が大きいのしかかってくる。そのための方策を専攻科挙げて考えなければならない。現在の定員は 1999 年度までのセミナー制を基として決められた定員で、今後の各専攻の応募状況によって、また、短期大学の組織改革によって変更も考えなくてはならない。

#### 5-3-2. 達成目標

作曲専攻と同様であるが、合格者ガイダンスの際に配布される、短大専攻科の学生便覧中の履修方法案内を見ると、履修の仕方、単位計算、必修科目、選択科目とその内容がよく理解できる。また、講義概要には授業のねらい、成績評価の方法が書かれている。

#### 5-4. 短期大学部専攻科における単位認定と学生に対する評価

##### [現状の説明]

短大専攻科における作曲専攻を例にして本項では記述するが、声楽専攻、器楽専攻においても各専攻が持つ特徴を生かし同様の単位認定・評価を行っている。

修了時に提出された作品を作曲担当教員が審査することによって、単位認定と評価を行なう。その他の授業においてはレポート、試験によってその単位認定と評価を行なう。授業の内容、レベルに関しては前述の各授業の高い出席率(出席を取った科目 2003 年度コンピューター音楽演習 初・中級、音楽史特論 1・2 においては平均 83.3~93.0%の出席率)と学生へのアンケートでその様子を知ることが出来る。現在、学生達は授業

に対してかなりの満足度を持って卒業しているので、専攻科として相応しい内容とレベルを有していると考えられる。

#### [自己点検・評価及び長所と問題点]

作曲専攻の単位認定は作品の内容により判断され、良い作品の場合修了研究発表の場で実際に音に出して発表される。自身の作曲作品を完全に再現するには、機材等の問題から個人的には難しいと考えられる。在学中に音にする機会をより多く設けて、卒業後も自身の中で、作品を音として繊細に感じるようになるまでの教育を心がけていきたい。

#### [将来の改善・改革に向けた方策]

特に今の体勢で改善・改革の必要はないと思われる。

### 6. 教育改善への努力

#### 6-1. 短期大学部専攻科における授業内容についてのアンケートの実施とその活用

##### [現状の説明]

現在、短大専攻科においては学生による授業“評価”という形態では行っていないが、2000年度より毎年11月に学生に授業“内容”等に関するアンケートを実施している。そのアンケート結果は短大専攻科運営委員会において検討、審議されてから短大教育委員会、理事会、教授会で審議されて必要、実行可能な内容は翌年より実施される。短大専攻科の修業期間は1年なので可能な限り学生の希望に沿うよう対応している。なお、本学では併設教育機関共通のアンケート実行委員会が発足し(2005年度11月から活動開始予定)、短大専攻科が独自で行うアンケートは2005年度で最後となる。

##### [自己点検・評価及び長所と問題点]

併設の大学及び短大では、「学生による授業評価アンケート」及び「教員による授業評価アンケート」が行われている。集計結果は報告書にまとめられ学内公表を行っており授業改善に活用されている。その実施年度等については、併設短期大学における自己点検・評価報告書にて示す。

短大専攻科では2000年度より授業内容等に関するアンケートを実施しており授業改善のための資料となっている。しかしながら、その回収率は次第に低くなっている(2000年度:82.7%、2001年度:51.8%、2002年度:41.6%、2003年度:46.4%、2004年度:9.6%)。特に2004年度の回収率の低下は著しい。アンケート調査を実施するにあたり、近年の学生気質の傾向、動向を調査した上で質問内容等を検討していく必要があるが、継続して同じ内容の設問への回答を得ることも大切であるため、幾つかの設問については固定していきたいと考えている。

#### **[将来の改善・改革に向けた方策]**

[現状の説明]で述べたように併設教育機関共通のアンケート実行委員会を起こし、2006年度より全学で行われるアンケートをアンケート実行委員会が統括していくことになっている。短大専攻科が独自で実施してきたアンケート結果、また回収率の問題等についてアンケート実行委員会において、今後協議、検討がなされる。短大専攻科運営委員会からの提案もしていきたい。

[自己点検・評価及び長所と問題点]で述べたようにアンケートの成果は授業改善、専攻科改善のために役立っているが回収率が下がってくるとその効果も期待しにくくなるので現在実施しているアンケートを大学及び短大で行われているアンケートと同じ形態にしていく必要があるかどうか今後検討していきたい。

### **6 - 2 . 授業改善 (FD 活動及び SD 活動等) への取組み状況**

#### **[現状の説明]**

本学では併設教育機関における大学運営委員会、短大運営委員会において、「FD (ファカルティ・ディベロップメント) 研究会」が2005年度より発足しているが、現在、短大専攻科では独自のFD活動のための組織及びSD (スタッフ・ディベロップメント) 活動の為の委員会はもっていない。

#### **[自己点検・評価及び長所と問題点]**

短大専攻科では、短大専攻科運営委員会において授業改善、教育改善について協議されている。運営委員会は定期的にかかれており、あらゆる議題に対処する様に取り組んでいる。また事務組織については併設の教育機関との共通組織として存在するために、短大専攻科として独自のSD活動の為の委員会は必要ないと思われる。

#### **[将来の改善・改革に向けた方策]**

短大専攻科は併設教育機関に比べると小規模であり、併設の教育機関にて行なわれるFD活動に本専攻科担当教員も参加していくことになる。その為、FD活動のための新たな委員会を短大専攻科として新たに設置する必要はないと考えている。短大専攻科運営委員会においても教育改善のための授業改革について今後の改善点を見出しており、本専攻科に着目したFD活動は同委員会にて担っていけると考えられる。

### **6 - 3 . 授業の担当教員の授業改革 (FD 活動) への意欲**

#### **[現状の説明]**

2004年6~7月、2004年12月~2005年1月にかけて併設の短期大学部において実施された「教員による授業評価アンケート」では、その回収率は88.4%、73.9%であった。短大専攻科においては、教員による授業評価アンケートは行われていない。

**[自己点検・評価及び長所と問題点]**

短大専攻科の授業担当委員はそのほとんどが短期大学部の授業を担当しており、教員による授業評価アンケートの回収率から見て、かなり多くの教員がFD活動に関心を示していることがわかる。この事から教員は授業改革への意欲を持ち、現状に対して改善点を見出していこうとする姿勢が伺われる。

**[将来の改善・改革に向けた方策]**

自らの授業を省みる機会として教員による授業評価アンケートを定期的に行う事が改善につながると思われる。今後は短大専攻科の授業に対する授業評価アンケートの実施が定期的に行われる様検討していきたい。

**7. 授業担当教員間での意思の疎通と協力体制（兼任教員との意思疎通を含む）**

**[現状の説明]**

各専攻から選ばれている短大専攻科運営委員によって短大専攻科運営委員会が定期的に行われている（2004年度は計9回）。運営委員がそれぞれの専攻を代表し、各部会と連絡し、教員間の意思の疎通、協力等のコミュニケーションが行われている。

**[自己点検・評価及び長所と問題点]**

短大専攻科運営委員会はおよそ月1回の割合で開催されている。各専攻から選出された教員が運営委員として業務にあたっているため、他専攻の教員ともコミュニケーションがとられており、各委員から各授業担当教員へと連絡がとられている。

**[将来の改善・改革に向けた方策]**

現在、短大専攻科運営委員会においては、主に実技系授業の担当教員が中心になって議事の審議が行われている。今後はさらに学科系授業担当教員との意思疎通、コミュニケーションも活発に行える様検討していきたい。

**特記事項**

**・授業の欠席3回以上の学生へのケアー**

同一授業において一定の期間連続して3回以上欠席の続く学生に対して、その理由、要因を聴取し、出席不足から単位未認定とならないよう警告するシステムを設けている。

**・修了研究（修了試験）における成績不良者の再試験**

修了研究（修了試験）本番において平常の力が発揮できなかった為に単位が認められなかった者に対して、再度チャンスを与えるシステム。本来再試験は行なわれないことになっているが、修了の学年においてはもう一度チャンスを与えることにしている。



